

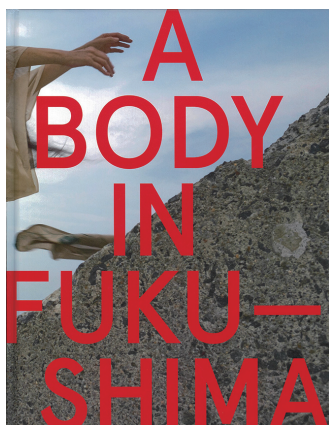
<書評>尾竹永子、ウィリアム・ジョンストン 『福島に行く』

著者	田村 美由紀
雑誌名	日本研究
巻	66
ページ	227-230
発行年	2023-03-31
その他の言語のタイトル	<Book Review>Eiko Otake and William Johnston, A Body in Fukushima
URL	http://doi.org/10.15055/00007968

尾竹永子、ウィリアム・ジョンストン
『福島に行く』

Elko Orake and William Johnston, *A Body in Fukushima*

田村美由紀



Wesleyan University Press, 2021

本書を手にした読者は、まずその重量感と装幀の迫力に驚かされるだろう。岸壁のような場所に腰かけた女性の姿を切り取った写真と、その全面に赤字でタイトルが記された印象的な表紙が、真つ先に目に飛び込んでくる。女性の表情は見えない。だが、風に靡く髪と衣装、そして差し出された両手は、切実に何かを訴えかけている。

本書は、ムーブメント・アーティストの尾竹永子と、写真家であり歴史学者でもあるウィリアム・ジョンストンがコラボレーションしたプロジェクト「A Body in Fukushima (福島に行く)」のパフォーマンスの模様をまとめた写真集である。東日本大震災、そして福島原発のメルトダウンから一〇年の節目に発表された本書には、震災の爪痕を色濃く残す福島の各地で——津波の被害を受

けた無人の駅で、空き家となった民家の前で、荒涼とした海岸で、放射性物質に汚染された廃棄物の側で——何かを祈るように踊る永子の姿が収められている。評者はパフォーマンスアートの専門家ではないため、芸術的観点から本書を批評できる立場にはない。したがって、ここではこのプロジェクトの成り立ちを踏まえた上で、二人の著者が本書を通して読者にどのような問いを投げかけているのかを、収録された写真と言葉から掬い取ってみたい。

尾竹永子は、一九七〇年代からパトナーの尾竹隆とともにダンスユニット「エイコ&コマ」としてニューヨークを拠点に活動し、欧米を中心に高い評価を獲得してきた。また、アメリカ同時多発テロ事件で多くの人命が失われた現場を目の当たりにしたのをきっかけに、二〇〇二年からはニューヨーク大学大学院にて原

爆文学の研究に着手し、自身の被爆体験を小説に書き続けた作家・林京子（一九三〇―二〇一七年）とも親交を深めていった。

二〇〇七年に修士号を取得して以降は、ウエズリアン大学でジョンストンとともに「日本と原爆」というコースの共同講師を務めるなど、原爆と文学・アート・身体との関係について学生たちにも積極的にレクチャーをおこなっている。

そんな彼女が、二〇一四年から新たに開始したのが、“A Body in Places（旅する身体）”と名付けられたソロプロジェクトである。舞台となるのは、駅や図書館、街頭など、従来の上演空間とは異なる場所だ。永子はそれぞれに固有の環境と自らの身体とをクロスオーバーさせながら、即興的な身体動作を生み出していく。このプロジェクトは、二〇一四年秋にフィラデルフィア三〇番街駅でおこなわれた計一二時間にも及ぶパフォーマンスを皮切りに、写真展やビデオ・インスタレーションとともにニューヨーク、香港、チリなどをツアーで回り、現在に至るまで七〇ヶ所以上の場所で行なわれるヴァリエーションの上演が重ねられている。

“A Body in Fukushima”は“A Body in Places”の一環として位置づけられるが、それは単なる派生作品であるばかりではない。本書では、「福島に行くことが“A Body in Places”を企画する上で強い動機付けとなったことが語られている。フィラデルフィアで初めてのソロパフォーマンスをおこなうことの必然性について模索してい

た永子は、自らの身体を通して「福島の一部を運ぶ」（本書、三二頁）ことにその糸口を見出す。福島に赴いた身体には、（目には見えない放射線を含む）その場所の痕跡や記憶が刻み込まれている。だとすれば、別の場所に移動してパフォーマンスをするとき、その身体は福島と福島から遠く離れたその場所を繋ぐ媒体となり得るのではないか。彼女は、時間的にも空間的にも隔たった場所や存在を、自らの身体を使って交差させ、その距離を変化させるための具体的な手立てとして、「私の身体を、福島に行つたものとして、また福島に戻るものとして提示したい」（同右）と考えたのである。

二〇一一年の夏に高校時代の友人と初めて震災後の福島を訪問した永子は、二〇一四年一月、かねてより親交のあつたジョンストンを誘い、作品制作のため再び福島に赴いた。その後、永子とジョンストンは、二〇一四年七月、二〇一六年八月、二〇一七年六月、二〇一九年一二月の計五回福島を訪れ、福島原発周辺の避難区域や帰宅困難区域を含む計八七ヶ所で“A Body in Fukushima”の無観客パフォーマンスと写真撮影をおこなった。このプロジェクトは写真展、映画上映、三・一一メモリアルイベントの開催など多様な形態で展開されており、初の写真集となる本書には、撮影した二万五千点以上の中から選ばれた写真が、五回の福島訪問の時系列に沿って掲載されている。また、それぞれのパートの間

に挿入されている二人のエッセイからは、このプロジェクトの背景にある問題意識を窺い知ることができるといえる。

原爆への関心から放射能汚染の脅威に直面した福島へと問題の射程を広げる本書の試みは、福島原発事故を戦争や過去の核被害（広島・長崎への原爆投下）などと重ね合わせ、それらの惨禍の歴史を被曝や大量死の視点から問い直そうとする近年の文化的動向を踏まえれば、さして目新しいものではない。しかしながら、言葉だけで語るのではなく、身体を起点としてこの問題にアプローチしようと試みたところに本書独自の価値が見出させる。二人は撮影のために何度も同じ場所を訪れている。したがって、約六年の間に撮り溜められた写真には、刻々と変化していくものと変化しないものの両方が写し出されている。新しく建設された防波堤や取り壊された民家がある一方で、静かに佇む神社や手つかずの自然がある。時間的経過がはつきりと感じられる二人の旅の記録は、一様に移り変わっていくのではない、複数の福島を浮かび上がらせるのだ。

また、そこで踊る永子のパフォーマンスにも時間的な要素が織り込まれている。彼女が身に着けている衣装は祖母の着物であり、踊りにしばしば用られる鮮やかな緋色の布も、祖母や母の着物に使われていた（おそらくは）紅絹裏を再利用し、高齢の母と一緒にそれらを縫い合わせることで出来上がったものだという（本書、

一三一頁）。つまり、永子のパフォーマンスにおいて重要な要素である着物や赤い絹布には、祖母から母へ、そして娘へと繋がってゆく女性たちの手仕事の痕跡とその身体的な記憶が刻印されているのだ。それは、社会的に周縁化されてきた女性たちのオルタナティブな歴史の系譜を象徴する素材だと言えるかもしれない。古い絹布はひどく傷んでおり、不用意に扱おうとすぐに破れてしまうほど繊細である。こうしたフラジャイルな布が永子の動きに応じて身体に纏われたり、引き摺られたりするとき、流れ出す血をイメージさせるその印象的な「赤」は、身体の被傷性を表象するものとなる。それは、月経や出産が被曝の後遺症として現れる出血を想起させるがゆえに、常に潜在的な恐怖や不安に晒されなければならなかった女性たちの姿を描く林京子の創作とも響き合う表現だと言えるだろう。着物や緋色の布を用いる踊りは、他の「Body in Places」のパフォーマンスにも見られるものだが、福島という場所に置かれることによつて、それらは新たな意味を帯び始める。福島という場所に赴き、「いま・ここ」には不在の女性たちの歴史が刻み込まれた着物や絹布とともに踊ることで、福島に流れる時間と個人の生の時間が、怒りや苦しみを表現する永子の情動的な身体動作を通してゆるやかに繋がりが合い、互いの傷が重ねられてゆくのである。

永子とジョンストンは、本書を「速くて遅い暴力と災害の本」

(本書、二二頁)だと位置づけている。ここで意識されているのは、ロブ・ニクソンが提唱した“Slow Violence”^①という概念である。

“Slow Violence”とは、即時的で瞬間的な暴力に対して、環境破壊のように時間や空間を超えて長期的な影響や犠牲をもたらす緩慢な暴力を指す。特に九・一一以降、破壊的な暴力のイメージが決定的になるのに伴って、スペクタクル性を欠く“Slow Violence”は相対的に不可視化されてきた。福島原発事故は、その被害の全容が未だ明らかではないという点において、まさに長期的な視野で取り組む必要がある「遅い暴力」だと言えるだろう。犠牲者が何世代にもわたって先送りされるような暴力を問題化するために、忘却の力学に抗いながら、そうした暴力についていかに継続的に思考し続けていくことができるのが重要な鍵となる。身体の動きを通して福島が抱える問題を思考するという本書のアプローチは、一見何の役に立つのかわからない、迂遠な方法のように見えるかもしれない。しかしながら、結論や問題の解決を急ぐのではなく、何度も福島に立ち戻り、その時々状況や環境に身を委ねながら、粘り強く福島の惨禍と向き合い続けるその姿勢は、非常に触発的である。

冒頭で述べたように、本書の外形は確かに強いインパクトを放っている。ただし、本書が追求しようとしているのは、明快でわかりやすいヴィジュアルやゲリラ的なパフォーマンスなどでは

なく、時間を積み重ねることによって徐々に深化していく表現の強度であることを見逃してはならない。その意味において、“A Body in Fukushima”の試みは、“Slow Violence”に対していかに持続的な注意を向けることができるのかという問いに対する、ひとつの有効な応答になり得ていると言えるだろう。私たちが本書に収められた写真を通して考えるべきは、こうした長期的な視点を持つ表現実践をどれほど真摯に受け止めることができるのかという、自らの態度そのものなのかもしれない。繰り返し福島を訪れ、その場所が発する声なき呻きや悲しみと対話しながら、繰り返し踊ること。そして、それを記録すること。福島という場所の記憶、その時間的・空間的な厚みを引き受けた永子の身体が読者に投げかけるメッセージは、果てしなく重い。

注

(1) Rob Nixon, *Slow Violence and the Environmentalism of the Poor*, Harvard University Press, 2013.